

観光資源の定義と分類に関する考察

Study on Definition and Classification of Resources for Tourists

高橋 光幸

TAKAHASHI Mitsuyuki

戦前から現在までの先行研究において、観光対象と観光資源および観光施設の定義と分類に関して、研究者がどのように考えてきたかについて整理・検討を行った。研究の結果、観光対象と観光資源の関係の捉え方には大きく2通りあること、観光資源という用語の定義、観光資源の各分類に含める事物の内容、観光施設に含める施設の内容は研究者によって異なることなどが明らかになった。

キーワード：観光資源、観光対象、観光施設

1. はじめに

観光の重要な構成要素である観光資源は、観光者にとっては自己の欲求や満足を充足するという価値があり、観光産業にとっては経済的な価値を有する。このため、観光資源は観光対象の素材であるとともに、観光上の経済的・社会的・文化的な効果を生み出す源泉であるといわれる。

観光資源の定義や分類方法・範囲などについては多くの研究が行われてきたが、現在までのところさまざまな解釈がなされ、見解が統一されていない状況である。定義が漠とした状態のまま観光資源という用語が使われている¹⁾。この理由として寺前(2007)は、わが国においては「規範性のある観光資源制度が存在しないまま、意識としての観光資源が存在する状態である。規範性のある観光資源制度が存在しないため、観光資源の定義をめぐって見解が統一されないまま論議が行われてしまうのである」と述べている²⁾。このような状況の中で、観光資源論の構築のために、基本的かつ重要な用語である観光資源の定義と分類方法および範囲について、統一した見解が求められている。

このような認識にもとづき、本稿は、観光資源の定義と分類方法について、戦前から今日までの研究者の論点を整理・分類し、その特徴と課題を明らかにすることを目的とする。観光資源という用語を研究の対象とするため、観光対象、観光施設等の関連用語の検討も合わせて行った。

上梓されている文献を中心に検討を行ったが、定義の不十分な論文や抽象的な論文などは検討

対象から除いた。わが国における観光資源の定義や分類方法の特徴を明らかにするためには、外国の研究者の観光資源に関する論点の整理・検討を行うことが重要であるが、今回はわが国の研究者に限定した。

2. 観光資源の定義と分類に関する先行研究

(1) 観光資源の語源と資源の概念

観光資源 (resources for tourists) という用語は、戦前わが国で特に国際観光事業の重要性が叫ばれ、その経済的効果が注目されたときに、一般産業における資源の語にならって採用された。一般産業において資源という場合には、それは生産過程において消耗する性質をもっているが、観光資源の場合には、文化資源はいうまでもなく、天然物に属するものでも、利用によって消耗することのないものである (井上 1967)³⁾。このように、一般経済用語としての資源と観光資源としての資源とは、用法からしてもかなり異なった意味をもっているが、資源も観光資源も経済的効用をもっているという点では共通点がある (末武 1984)⁴⁾。広辞苑によると、資源とは「生産活動のもとになる物質・水力・労働力などの総称」といわれるが、研究者によってさまざまな定義がなされている。

著名な経済学者で資源研究の権威であるジンマーマン (1985) は、資源という言葉は、「事物または物質に当てはまるのではなく、事物または物質の果たしうる機能、あるいはそれが貢献しうる働きに当てはまる」のであり、「資源は存在するものではなくて、生まれるものであり、静的なものではなく、人間の欲望と人間の行動に応じて拡大したり収縮したりするものである」と述べている。ジンマーマンは、資源は生まれるもの、創造するものという例の一つとして、ブラジルのある鉄鉱床を取り上げ、「中立的事物」の状態から鉄 (鉄鉱石) という資源への転換を達成するために7つの要素 (国際協力、資本 (融資・機械設備・技術の形をとる)、ブラジル国産鉄鋼製品の国内市場、ブラジル鉄鉱石に対する世界市場、労働力等、近代的衛生施設、近代技術) があつたことを述べている⁵⁾。

また、佐藤仁 (2011) は、「資源はさまざまな原料・エネルギーを生み出す源であり、原料そのものではない。石炭や鉄は原料なのであって、資源ではない」として、資源という用語を「働きかけの対象となる可能性の束」と捉え、資源は人間社会からの働きかけを受けて初めて有用性を発揮するとしている。具体的には、森林で覆われた鉱山から産出される鉱物は資源であり、鉱物から生み出される石炭や鉄は原料、それを活用して動力や機械が生まれるということである。佐藤は、財とは「人間に直接的な効用をもたらすような有形・無形のもの」として、資源から生み出される原料等を財 (資源生産物) といっている⁶⁾。

さらに、科学技術・学術審議会資源調査分科会 (2010) は、「資源調査分科会の前身である資源調査会においても、「資源とは人間が社会活動を維持向上させる源泉として働きかける対象となりうる事物」(1961) という広い定義をしているが、このように「人の働きかけ」によって事物が資源に「なる」という点は、この定義の重要なファクターであり、これを抜きにして資源論を論じることにはできない」と述べている⁷⁾。

(2) 戦前から1960年代までの観光資源の定義と分類

1) 井上萬壽蔵

旧鉄道省国際観光局の役人であった井上は、観光欲望の目的物となるものを観光資源と捉え、観光資源がその欲望を充たす場合に観光財と名づけた(井上 1940)。また、井上は、観光資源は、観光目的物、あるいは観光財の全体をさしている(井上 1957)。

井上は、観光資源を「無意識的資源」と「意識的資源」に分けている(井上 1940)。「無意識的資源」は人間の意識的工作上に基づかないで、たまたま観光価値を有する観光資源であり、「自然資源」(気候、地形、地質など)と「文化資源」(人情、方言、都邑、史跡、風俗、行事、建築、庭園、産業など)に区分している。「意識的資源」は意識的工作上に基づく観光資源であり、「文化資源又は総合資源」(無形のものにはサービスや民謡等、有形のものにはクアハウス、カジノ、娯楽場、遊園地、国立公園、博物館等)としている。

その後、井上は、「観光施設と認められるもの、たとえば公園・娯楽場・遊園地・博物館などは、観光目的物と呼ぶことはさしつかえないにしても、観光資源と呼ぶことは当たらない」(井上 1957)として、以前に観光資源に含めたこれらの施設を観光施設と捉えなおし、観光資源の分類から除いている。この段階では、観光目的物を観光資源と観光施設に分けている。

さらに、井上は、対象として観光意欲を満たすものを「観光対象」と呼び、観光対象は、移動そのもの、自然的(気候・風土、地形・地質など)、文化的(生活、行事、芸能、史跡、都市・田園、文化財、郷土食、庭園、産業、施設など)、行動(行楽・スポーツなどをふくむ)の4つに区分している(井上 1967)。そして、個々の観光対象を観光資源と呼ぶことは適当ではないとして、それらのものの基盤となるものを総合的に包括して、観光資源を自然観光資源、文化観光資源、両者のまじり合った観光資源と大局的に捉えている⁸⁾。

2) 田中喜一

わが国の観光研究において先駆的な活躍をした田中(1950)は、「或土地が観光地として繁栄するためには、自然的或は人文的に何等か固有の吸引力が存在しなければならない」として、観光客に対する「固有の吸引力」を有するものを「狭義における本来的観光資源」と捉えている。そして、「観光資源は(中略)諸種の施設が加わり接遇上の努力が拂われることによって愈々その価値を高め得る」、「観光資源は如何に優れたものであっても、これが観光客にとり容易に接近し又十分に鑑賞し得る状態に置かれねば、その真価を發揮し得るものではない」として、諸種の施設の整備により観光客が観光資源へ容易にアクセスできるようになることによって、本来的観光資源の価値が高まると述べている。

田中は、「狭義における本来的観光資源」として、自然的観光資源(自然的条件、自然資源)と人文的観光資源(文化的条件、文化的観光資源、人文資源)をあげている。また、「広い意味において観光資源を構成するもの」として、上記の2つに加え、社会的条件(社会的環境)をあげている。このように、観光資源について狭義・広義の2つの捉え方をしている。

自然的観光資源は大きく景勝地と療養地に分け、景勝地として山岳、峡谷、森林、湖沼、海岸、平原など、療養地として保護的気候、温泉の湧出などをあげている。人文的観光資源は、「文化資源としてその土地の本来的事情を形成せるもの」(ある土地に固有の文化資源)として、過去の工作物(過去の文化遺産)である城塞・王宮・社寺・建築・美術・庭園など、伝統的に継承される

風俗・行事・民藝・民謡・民踊など、そして都邑や村落をあげている。さらに、「時として人為的工作を以て観光資源を加えることがある」として、「常住的な施設と一時的な催物」を人文的観光資源に含めている。常住的な施設として、芸術的な施設、学術的な施設、宗教的な施設、経済的な施設（商品陳列館、貿易奨励館、博覧会、見本市など）、体育的施設、保養的施設（温泉の療養館、遊園地など）などをあげ、一時的な催物として祭礼行事、民謡大会などをあげている。

社会的条件については、「観光客の往来はこれを迎えるその土地の社会的環境によって左右されるところが少なくない」として、交通業・宿泊業・料理業・土産品業等の施設とサービスをあげ、次に、その土地全体として交通・滞在・居住の条件を改善して快適な環境を作ることをあげている。さらに、「一国全体を通じ官民共に外客迎接態度方法については遺憾なきを期することも亦観光決定上有利に作用する」としている。

田中は、観光客の受入態勢を作るために整備する諸種の施設や、「先天的な観光資源に対する粉飾として人為的工作を加え、一段とその土地の魅力を高めて、観光客の足を長く引き留める」施設を観光施設としている。具体的には、各観光地に共通の施設として衛生、交通及び宿泊の施設をあげ、このほかにその土地の事情に応じて整備する施設として保健療養施設、娯楽施設、文化教養施設、産業経済施設をあげている。また、その土地に相応しい催物も観光施設としてあげている。

これらの施設のうち、衛生、交通及び宿泊の施設は、広義の観光資源に含めている「社会的条件」に該当し、保健療養施設、娯楽施設、文化教養施設、産業経済施設および催物は、人文的観光資源の中の「時として人為的工作を以て加える観光資源」に該当する。このように田中は、観光資源と観光施設という言葉を使い分けている⁹⁾。

3) 津田 昇

津田(1969)は、国際観光資源とは、「国際観光客が、その観光動機ないし観光意欲の目的物とするところの観光対象である」と定義し、「国際観光資源は、これを目的的にみれば、国際観光対象と同義語である」と述べている。国際観光資源に必要な要件は、国際観光客にとっての「魅力性」と「牽引性」であり、国際観光動機を満足させることが国際観光資源の価値であるとしている。

国際観光資源には「あるがままの観光資源」と「作る観光資源」があるとしている。「あるがままの観光資源」とは、「人工的に手を加えないで、そのまま観光資源として役立つ観光資源」であり、「作る観光資源」とは「人工的に開発した観光資源」である。この2つの観光資源の関係について、「ナイアガラの瀑布は、どんなにあるがままの自然観光資源として美しくても、交通施設の便を開き、休憩・宿泊施設を設け、観光客の喜ぶ施設を設置するのでもなければ、多数の観光客の観光対象とはならない」としている。「あるがままの観光資源」に「作る観光資源」が加わることによって「多数の観光客の観光対象」になると述べている。

津田は、国際観光資源(国際観光対象)を、自然的資源(自然対象)、文化的資源(文化対象)、社会的資源(社会対象)、産業的資源(産業対象)の4つに分けている。自然的資源は、気候・風土、風景、温泉、天然の「気象」、動植物、都市公園に分けている。文化的資源は、文化財資源と博物館に分けている。文化財資源は、有形文化財、無形文化財、民俗資料、記念物(遺跡、名勝

地、天然記念物など)の4種に分けている。博物館は、郷土博物館、文化博物館、美術館、科学博物館、動物園、植物園、水族館などである。社会的資源は、人情・風俗・行事、国民性・民族性、生活・食物、芸術・芸道・芸能・スポーツ、教育・社会・文化施設に分けている。産業的資源は、工場施設、農場・牧場施設、社会公共施設(港湾、ダム、運河、道路施設、交通施設など)、見本市・博覧会・展示会に分けている。

また、国際観光の受け入れの基盤となる各種施設を「国際観光施設」と呼び、国際観光宿泊施設とその他の国際観光施設(休憩施設、案内施設、食事施設、国際会議場など)に分けている¹⁰⁾。

(3) 1970年代以降の観光資源の定義と分類

1) 前田 勇・橋本俊哉

前田・橋本(2006)は、観光対象とは、「観光主体である観光者の多様な欲求を喚起したり、欲求を充足させるための客体となる対象」であり、「素材としての観光資源と、資源を生かして観光者の欲求充足に直接寄与する観光施設(含サービス)」とに大別することができるとしている。また、観光対象は、「人々に観光行動を生起させるだけの魅力ないしは誘引力をもつ目的となる事物」であるとも述べている。「美しく豊かな自然環境は“素材”としての観光資源であり、その自然の美しさを(多くの人びとが)享受しうるためには、宿泊施設などの観光施設とそれに付随するサービスが必要」と述べている。観光施設とサービスがかけていたとしても、自然の美しさを享受することは可能であるが、その場合には限られた人数になるとしている。

観光資源は、自然観光資源、人文観光資源および複合型観光資源に区分されるとしている。自然観光資源は自然によって創造された造作物であり、人文観光資源は人間の手によって創られた有形・無形の所産である。自然観光資源と人文観光資源が密接に結びついて、自然とも人文ともいえないような観光資源が存在し、これらを複合型観光資源と称している。大都市、農山漁村、郷土景観、歴史景観などを複合型観光資源としてあげている。

観光施設として、宿泊施設、飲食施設、物品販売施設、レクリエーション施設(スポーツ・趣味・娯楽施設など)、文化・教育施設(博物館、資料館、動植物園など)、観光案内施設(観光案内所、ガイド、展望台など)、公共サービス施設(治安、保全、水、エネルギー、ゴミ処理など)をあげている。また、観光主体と観光対象を結びつける機能を果たしているものを観光媒体と呼び、それは基本的に移動手段と情報であるとしている¹¹⁾。

2) 末武直義

末武(1984)は、観光対象とは「観光欲求を充足せしめる観光行動の対象物」であり、その価値は「観光欲求に対する欲求充足度」、すなわち、「いかに観光客を満足せしめるか」ということにあるとして、観光対象の価値の大きさは、観光対象がもつ「欲求充足機能」と「観光客誘引機能」の大きさに決まると述べている。

観光対象は、観光資源と観光施設(観光施設において提供される諸サービスを含む)に分類している。観光資源とは、「観光客にとって、自然または人文上の観光対象物となりうるもの」であり、「観光対象の中でいわば素材部分をさし、観光資源開発による人為的工作によって実際に利用しうる機能価値をもつ観光対象」となるとしている。観光施設とは、「観光資源を観光対象として

機能させるための施設」であり、一方ではそれ自体観光対象としての機能をもつとしている。

末武は、観光資源を自然資源と人文資源に分類し、それらがもつ特色と機能面から細分化している。自然資源は、地形・地質・生物・気象・天象などの自然観光資源と、滞在や保養目的となるものや自然環境の形成要素となる気候・鉱泉・地形などの滞在型観光資源に分けている。人文資源は、文化的観光資源、社会的観光資源、産業経済関係観光資源に分けている。文化的観光資源は文化遺産と文化的展示建造物、社会的観光資源は社会形態（集落、社会的諸制度、国民性、民族性など）と生活形態（人情、風俗、習慣、生活様式、食事など）、産業経済関係観光資源は農林漁業関係のもの・工業関係のもの・商業関係のものである。

また、観光施設を移動関係施設（交通施設）、滞在大きおよび接遇関係施設（宿泊施設、休憩施設、食事施設）、情報関係施設（案内施設）、観光レクリエーション関係施設（売店施設、娯楽諸施設、スポーツ・レジャー施設など）に分類している¹²⁾。

3) 岡本伸之・越塚宗孝

岡本・越塚（1986）は、観光対象とは「観光者の欲求を喚起したり、充足させる目的物」で、「人々に観光行動を生起させるだけの魅力ないし吸引力をもつ何か」であるとしている。観光対象は、観光資源と観光施設（含サービス）から構成され、観光資源とは「観光対象のいわば素材」であり、観光施設（含サービス）とは「観光資源を観光対象として機能させ、あるいはそれ自身誘引力をもつもの」であるとしている。観光資源は、「観光施設（含サービス）と結びついてはじめて観光対象としての誘引力をもつ」のであり、観光資源としての山は、観光施設が整備され、情報機能と移動機能という媒介機能が働くことによって、はじめて潜在的な可能性が顕在化し、美しい山として、多数の人々の観光対象となるとしている。

岡本・越塚は、観光資源を自然観光資源、人文観光資源、複合型観光資源に分類し、観光施設（含サービス）を宿泊施設、飲食施設、物品販売施設等に7区分している¹³⁾。

4) 小谷達男

小谷（1994）は、観光対象と観光資源は概念上の相違があるとして、次のように述べている。観光対象とは、「人びとが観光上の魅力を感じる事象（モノやコト）」で、「人びとによって観光上の価値を付与された事象」のことである。そこで、観光対象とは「人々が観光上の欲求を喚起したり、その充足を得ることのできる事象」であると規定しうる。そして、観光対象はそれ自体に観光上の価値を内在しているか否かにかかわらず、個々人の主観や嗜好次第で無数に存在するものであることから、観光対象の価値は、「個々人の情感や主観に基づいた効用価値（満足の度合い）に基づいて評価」される。

一方、資源論の立場から、観光資源は「観光上の諸効果（経済的・社会的・文化的）の源泉として認識されるもの」であり、「一部の限られた人びとにとって優れた観光対象であっても、観光事業の成立が不可能な観光対象—換言すれば、一定の諸効果を期待することのできない観光対象は—観光資源とはいいがたいのである」と論じている。

小谷は、観光資源について、「観光上の諸効果を生み出す源泉として、働きかける対象となりうる事象である」と定義し、観光資源の利用にあたっては、観光対象として質的・量的に優れている

ること（多くの人びとによって観光上の満足が高いと考えられる事象であること）、利用にあたって採算性が見込めること（利用（開発）に要する投資採算性があること）という二つの条件を備えていることが不可欠としている。また、観光資源の資源価値とは、「その観光資源を開発することによって生み出される観光上の諸効果の大きさ」であるとしている。

小谷は、観光資源を形成する要素の観点から、観光資源の種類を自然系資源（自然景観系）と人文系資源（人文景観系）に分類し、「みる」、「やすむ」、「する」という観光行動のプロトタイプから、観光資源の類型を鑑賞型資源、休養型資源、スポーツ・レクリエーション型資源に分類している。

また、観光開発とは、「観光資源の特性に基づき、観光行動上の便益機能を整備・促進すると共に観光上の諸効果を生み出し、あるいは高めることを目的とした開発行為の総称」として、便益施設として、交通施設、鑑賞施設、上下水道・電気・通信施設などの基盤整備および公園等、飲食施設、宿泊施設などをあげている¹⁴⁾。

5) 足羽洋保

足羽（1997）は、観光対象とは「人の観光意欲を満たすすべてのもの」であり、観光資源は「観光対象から観光事業者の供給する財貨とサービスを取り除いたもの」としている。観光資源の分類方法にはいろいろな説があるとして、最も細かく分類したと思われる津田昇の『国際観光論』を参考にして、自然的資源、文化的（人文的）資源、社会的資源、産業的資源に分類している。

自然的資源は天然資源と天然現象、文化的（人文的）資源は有形文化財、無形文化財、民俗文化財、史跡、名勝、天然記念物、伝統的建造物群、歴史的風土、風土記の丘、歴史的港湾環境に分類している。社会的資源は有形社会的資源（都市、都市公園、教育・社会・文化施設）と無形社会的資源（人情・風俗・民話・行事など、国民性・民族性、衣食住・生活、芸術・茶道・芸能・スポーツ）に分類し、産業的資源は工場施設、観光農林業、観光牧場、観光漁業、展示施設に分類している¹⁵⁾。

6) 山村順次

山村は、「人々を引きつける魅力的な観光対象は、それが自然的であれ、人文的であれ観光資源をなす」（山村 1995）、観光資源は「観光客をひきつける魅力的な対象物」（山村 2006）として、観光対象と観光資源を同一視している。そして、観光資源を山岳・溪谷・海岸・植生・温泉などの自然観光資源と史跡・歴史的町並み、農山漁村や都市の景観、祭り・伝統芸能などの人文観光資源に大別している。また、テーマパーク、スキー場などの観光対象施設を人文観光資源に含めることもあると述べている（山村 2006）。

観光対象物が存在し、人々がそこを訪れるようになった観光資源は観光地点として認識され、そして、観光地点のまわりに土産物店や飲食店、宿泊施設などが立地すると観光地を形成することになると述べている。このことによって、観光資源はより大きな価値を有するとしている（山村 1995）。

また、「観光客に係る施設」を、観光客が目的とする観光対象施設と観光客が利用する観光利用施設とに分けている。観光利用施設には、宿泊施設、飲食施設、土産物店、交通機関などを

あげている。観光利用施設である交通機関そのものが観光資源化され、観光対象施設となることもあると述べている（山村 1997）¹⁶⁾。

7) 溝尾良隆

溝尾は、観光対象とは、「観光者の誘致力となるもの」（溝尾 2001）、「旅行者の旅行目的となるもの」（溝尾 2003）といい、観光対象には観光資源と一部の観光施設（観光目的となった宿泊施設や買物・飲食施設など）があるとしている（溝尾 2009）。観光資源は、「各種の目的に使用可能な資源が、観光対象として顕在化された資源」であり（溝尾 2011）、「観光的に価値がなければ観光資源といえない」と述べている（溝尾 2009）。

溝尾は、2001年に観光資源を自然資源、人文資源Ⅰ、人文資源Ⅱ、複合資源に分類したが、2010年には複合資源を削除し、自然資源、人文資源Ⅰ、人文資源Ⅱに分類している。複合資源を削除した理由は、「単一資源と複合資源との間の線引きが難しくなるし、あえて線引きする必要のない」としている（溝尾 2011）。

人文資源Ⅰは、「人間が創造し、長い時間の経過から価値が見出されて、今日、評価の定まっているもの」をいい、史跡、寺社、城跡・城郭、庭園、年中行事、碑・像をあげている。人文資源Ⅱは、「現在は強い集客力をもつが、将来にわたりその集客力を維持できるかどうか不安定なもの」をいい、橋、近代公園、町並み・都市景観・建造物（塔、高層ビルなどの都市建造物）、観覧施設（博物館・美術館、動物園・植物園・水族館などの各種施設）、イベント、テーマパーク・遊園地、田園景観・郷土景観をあげている。そして、「将来、その価値が存続し評価が定められたときには、人文資源Ⅰに移動する」としている。

溝尾は、観光者が快適に旅行するためには飲食や物品販売、宿泊などに対応するサービスが必要として、これらサービスを提供する施設を観光施設と呼んでいる¹⁷⁾。

8) 香川 眞

香川は、観光対象とは「観光者、観光客を惹きつける誘因すなわち対象」として、宿泊施設や移動手段の列車までを含めている。観光資源は、「一般に観光対象としての可能性を持つ資源」で、「あくまで潜在的なものであり、観光施設、サービスとともに対象化される」と述べている。また、「観光主体と観光対象を結ぶもの」を観光媒体と呼び、「移動、宿泊、手配、情報などがこれにあたる」としている（香川 1996）。

その後、香川は、「観光者にとっての観光対象は事業者にとっての観光商品である。観光資源は観光対象あるいは観光商品の素材であり、ある場合には、観光対象あるいは観光商品そのものである」（香川 2007）と、観光対象、観光商品、観光資源の関係を整理している。

そして、観光行動論の立場からは、「観光対象は観光資源と観光施設（サービスも含める）からなると説明されてきた」が、観光事業論の立場では、観光資源は自然観光資源と人文観光資源、これの複合としての複合観光資源に分類され、「観光施設は枠外におかれていた」と述べたのち、最近の動向をみると、観光事業論においても、観光行動論で観光施設として分類していた事柄を、観光資源として位置づけていることから、観光資源を、自然観光資源、人文観光資源、複合観光資源、施設観光資源の4つの枠組で分類し、さらに、「これをもって、同時に観光対象の分類とす

る」としている¹⁸⁾。

9) 北川宗忠

北川 (1999) は、観光対象とは、「観光者に移動、滞在、レクリエーションなどの観光行動を喚起し、引きつけ、その欲求を充足させるもの」であり、観光資源と観光施設（観光資源の利用促進、利用サービスのためにつくられた宿泊、レストラン、文化・教育等に関連する施設）とに分類されるが、観光対象は観光資源と観光施設がそれぞれ一体となって観光目的物として存在するとしている。

観光資源とは、「欲求を充足させる素材」で「観光行動の目標」であり、通常、自然観光資源と人文観光資源に分類できるとしている。しかし、観光資源として観光対象施設（観覧施設・娯楽施設・スポーツ施設・産業施設・生活施設・年中行事・芸能・工芸技術など）を分類する場合や、自然観光資源と人文観光資源が複合した複合型観光資源を分類する場合があるともいっている¹⁹⁾。

10) 須田 寛

須田 (2009) は、観光対象とは「観光客にとって観光行動の対象になるもの」であり、そこから観光客が一定の観光効果（満足、充足感）を得られたとき、観光客にとってその観光対象が観光資源として認められたことになるとしている。

ただし、「ある観光対象が必ずしもすべての人々にとっての観光資源とはならない。観光対象を訪れても（観光意思をもって観光客が観光対象に働きかけたと考える）、満足すべき観光効果が得られなかった場合、その対象はその観光客にとっては観光資源とはならない」としている。このように、観光資源といわれているものは、「大多数の人々に観光効果をもたらしているもの、すなわち最大公約数的なものを意味している」のにすぎないと論じている。

しかし、須田は、観光対象となる以上、人々になんらかの観光効果をもたらすことが多いので、観光対象のほとんどが、大多数にとって観光効果をもたらすものと考え（一部の人にとって効果のなかったものも含め）、観光対象と観光資源をほぼ同一視している。

須田は、観光資源を自然観光資源、歴史文化観光資源、複合観光資源に分類している。自然観光資源には、自然公園、動物園・植物園・水族館、風光を含め、歴史文化観光資源には、神社寺院（庭園）、美術館・博物館・テーマパークを含めている。複合観光資源は、自然観光資源と歴史文化観光資源の両資源にわたる観光資源であり、都市、農村、リゾートなどをあげている。

また、観光行動を支援し、その効果をより高めるものを観光（支援）基盤として宿泊・交通・情報等をあげ、その機能、サービスの存在が観光客の観光動機を刺激することもあるとしている²⁰⁾。

11) 羽田耕治

羽田 (2011) は、観光資源とは「観光の対象になる可能性をもっているモノ（コト）＝素材」で、その性格によって自然系資源、人文系資源、複合資源に分類できるとしている。自然系資源は自然にあるもの、人文系資源は人間が作りだしたもの、複合資源は複数の資源が組み合わせられて作られているものとしている。

一方、観光対象とは、「人々が観光面で魅力を感じ、人々の観光行動の目的となるモノ（コト）」であり、「観光資源の多くは、そのままの状態では利用することは難しい。（中略）観光資源が観光対象となるためには、人間がお金と知恵、さらに時間をかける必要がある」と述べ、観光資源を開発・整備することで観光対象になると述べている。たとえば、観光資源である美しい池や滝は、遊歩道などのように、その場所へアプローチする到達手段や眺める場所が確保されていなければ観光の対象にはなりにくいとしている。

羽田は、観光という言葉の解釈によって、観光対象の内容は変わるとして、3通りの解釈をしている。観光を狭く解釈した場合は、観光資源に何らかの手を加えて利用可能になったモノ（コト）が観光対象となり、観光を広く解釈した場合は、狭い意味の観光対象に加えてレクリエーション施設が含まれる。観光をさらに広く解釈した場合は、交通施設や宿泊施設、ショッピング施設などが観光対象に含まれるとしている。そして、観光施設という用語は使っていない²¹⁾。

12) 日本交通公社

観光対象とは「観光資源のほかに、観光事業者が供給する財貨・サービスを含めて、観光者にとり魅力または必要を感じずる一切の事物」を指しているとして、「人の観光意欲を満たすすべてのものを観光対象という。観光目的物と呼んでも大差はない」としている。また、観光資源は、自然観光資源、人文観光資源を範囲としているとしている²²⁾。

以上、先行研究の成果についてできるだけ客観的かつ体系的に把握し整理してきた。これらの研究成果をもとに、次章では観光対象や観光資源の定義と分類について考察を行いたい²³⁾。

3. 観光資源の定義と分類に関する考察

(1) 観光対象と観光資源の定義

1) 見解 A：観光対象は観光資源と観光施設から構成される

立山に 350m という日本一の落差を誇る称名滝がある。アプローチ道路が整備されていない時には、観光資源としての称名滝へ行って楽しみたいと思っても、実際には限られた人しか行くことができなかった。しかし、称名滝への道路（移動機能）と情報機能が整備され、さらに、道路終点付近における飲食店や土産品店の整備、滝への遊歩道や滝見台園地の整備により、障害者を含め多数の人々が容易に楽しめることができるようになった。すなわち、観光資源としての称名滝に移動機能や情報機能という媒介機能、遊歩道や園地などの観光施設が整備されることにより、称名滝は多数の人々の欲求を充足したり、観光意欲を満たす観光対象となった。

観光対象と観光資源、観光施設の関係は上記のようにになっているが、観光対象に何を含めるかについて大きく 2通りの考え方がみられる。一つは、観光対象は観光資源と観光施設から構成されるという考え方（見解 A と呼ぶ）であり、二つは、観光対象に観光施設を含めないという考え方（見解 B と呼ぶ）である。

観光対象は観光資源と観光施設（サービスを含む）から構成されるという考え方（見解 A）では、観光対象とは、「観光主体である観光者の多様な欲求を喚起したり、欲求を充足させるための客体となる対象」（前田・橋本 2006）、「観光欲求を充足せしめる観光行動の対象物」（末武 1984）、

「観光者の欲求を喚起したり、充足させる目的物」(岡本・越塚 1986)、「観光者に移動、滞在、レクリエーションなどの観光行動を喚起し、引きつけ、その欲求を充足させるもの」(北川 1999)と定義している。

観光資源については、観光対象の素材(前田・橋本 2006)、「観光対象の中でいわば素材部分」(末武 1984)、「観光対象のいわば素材」(岡本・越塚 1986)、「欲求を充足させる素材」(北川 1999)と定義している。

また、観光資源を観光対象として機能させ、あるいはそれ自身が観光対象となる施設については、前田・橋本(2006)、末武(1984)、岡本・越塚(1985)、北川(1999)は観光施設と呼んでいる。

観光対象は、観光資源と観光事業者の供給する財貨とサービスから構成されるという見解も第一の考え方に含めることが可能である。足羽(1997)は、観光対象とは「人の観光意欲を満たすすべてのもの」、観光資源とは「観光対象から観光事業者の供給する財貨とサービスを取り除いたもの」とし、日本交通公社(1973)は、観光対象とは「観光資源のほかに、観光事業者が供給する財貨・サービスを含めて、観光者にとり魅力または必要を感じずる一切の事物」、「人の観光意欲を満たすすべてのもの」としている。

以上のように、観光対象は観光資源と観光施設(サービスを含む)から構成されるという見解では、観光対象および観光資源の定義は共通している。

なお、観光資源の定義にあたっての前提となる考え方を整理しておきたい。個人によって観光上の魅力を感じる事象は異なることから、地域のすべてが観光資源となりうるが、この立場では、一部の限られた人々ではなく、多くの人々が観光資源を享受できることが重要であると考えている。それは、「きわめて限られた人々だけが、興味の対象とするようなもの、そのものの性質上人々の見物等の対象とはなりえないようなものは、社会通念上観光資源とは考えられない」(観光法規研究会 1963)ためである²⁴⁾。

2) 見解B：観光対象に観光施設を含めない

次に、観光対象に観光施設を含めないという考え方(見解B)である。この見解の中には、観光資源に観光施設の一部を含めている研究者もいるが、あくまで一部であることから見解Bに分類している。この見解は、観光資源の捉え方の違いによって2つのタイプに区分が可能である。

一つ目は、観光客の立場から観光資源を捉える考え方(見解B-1と呼ぶ)である。井上は、観光欲望の目的物となるものは観光資源、観光資源がその欲望を充たす場合に観光財(井上 1940)、観光資源は観光目的物あるいは観光財の全体(井上 1957)、対象として観光意欲を満たすものは観光対象(井上 1967)と述べている。

田中(1950)は、観光対象という用語を用いていないが、観光客に対する「固有の吸引力」を有するものを「狭義における本来的観光資源」と捉え、諸種の施設とサービスが加わることにより観光資源の価値が高まるとしている。

津田(1969)は、国際観光資源とは「国際観光客が、その観光動機ないし観光意欲の目的物とするところの観光対象」と定義し、国際観光客が国際観光資源に到達し楽しむことができるようになった時に、国際観光資源は観光対象になるとしている。ただし、津田は、国際観光資源の中

に道路施設や交通施設などの媒介機能を含めている。

山村は、「人びとを引きつける魅力的な観光対象は（中略）観光資源をなす」（山村 1995）、「観光客をひきつける魅力的な対象物、すなわち観光資源」（山村 2006）と述べ、観光対象と観光資源を同義語と捉えている。

溝尾は、観光対象とは「観光者の誘致力となるもの」（溝尾 2001）、「旅行者の旅行目的となるもの」（溝尾 2003）で、観光対象には観光資源と観光目的となった一部の観光施設（宿泊施設や買物・飲食施設など）がある（溝尾 2009）としている。また、観光資源は「各種の目的に使用可能な資源が、観光対象として顕在化された資源」（溝尾 2011）と述べている。

須田（2009）は、観光対象とは「観光客にとって観光行動の対象になるもの」であり、そこから観光客が一定の観光効果（満足、充足感）を得られたとき、観光客にとってその観光対象が観光資源として認められたことになるとしている。

羽田（2011）は、観光対象とは「人々が観光面で魅力を感じ、人々の観光行動の目的となるモノ（コト）」で、観光資源とは「観光の対象になる可能性をもっているモノ（コト）＝素材」としているが、観光という言葉の解釈によって、観光対象の内容は変わるとして、3通りの解釈をしている。

このように、観光客の立場に立って観光資源を捉える見解 B-1 では、観光資源とは、観光動機や観光意欲・観光欲望の目的物、観光客を引きつける魅力的な対象物、観光の対象になる可能性をもっているモノ（コト）＝素材などというように、研究者によって観光資源の定義に多少の違いが見られる。観光対象の定義についても、観光資源と観光対象を同一視する考え方、観光対象としての可能性をもった観光資源が顕在化したのが観光対象という考え方など、定義の違いが見られる。

観光資源を観光対象として機能させ、あるいはそれ自身が観光対象となる施設については、田中（1950）は観光施設、津田（1969）は国際観光施設、山村（1997）は観光客に関する施設、溝尾（2011）は観光施設、須田（2009）は観光（支援）基盤という用語を使っている。

二つ目の観光資源の捉え方は、観光資源は、多数の人々の欲求充足、観光意欲の満足と同時に、事業としての採算性がとれるものであるという条件が不可欠という考え方（見解 B-2 と呼ぶ）である。小谷（1994）の考えが代表的である。

小谷は、観光対象と観光資源は概念上の相違があるとしてうえで、観光対象とは「人々が観光上の欲求を喚起したり、その充足を得ることのできる事象」であり、観光対象の価値は、「個々人の情感や主観に基づいた効用価値（満足の度合い）に基づいて評価」されるとしている。一方、観光資源は「観光上の諸効果（経済的・社会的・文化的）の源泉として認識されるもの」であり、「観光事業の成立が不可能な観光対象－換言すれば、一定の諸効果を期待することのできない観光対象は－観光資源とはいいいがたい」と論じている。観光施設については、便益施設という用語を使っている。

（2）観光資源と観光施設の分類

1) 観光資源分類の目的

観光資源の分類は、分類する目的のもとに行われるはずである。しかし、これまでの研究では、

分類の目的や意義についてほとんど論じられてこなかった。ここでは、分類の意義について言及している数少ない研究者の見解をみてみたい。

末武（1984）は、観光資源はそれぞれが異なった性質をもっているため、観光地としての特色を形成することになる。したがって、観光事業経営では、どの種類の観光資源をいかに活用するかが基本的な課題となるという考えから、観光資源を2つに分類し、それらの特色と機能の説明を行っている²⁵⁾。また、小谷（1994）は、観光資源は、その特性や規模に基づいた資源価値評価だけでなく、立地条件や開発規制条件などの総合評価が必要と述べ、一般的な評価基準として日本交通公社の観光資源評価基準をあげている。このことから、小谷は、観光資源分類の先に観光資源評価を意識していたのではないかと推察される²⁶⁾。同様に、溝尾（2011）は、観光資源の評価は観光学の重要な課題である。それは、観光資源の誘致力、観光ルートの形成、観光資源の保護・保全のための客観的な数値になるからであると述べ、観光資源を自然資源と人文資源に分ける意義は、観光資源の評価・見方にも関係するとしている²⁷⁾。

2) 観光資源と観光施設の分類

次に、観光資源の分類についてみてみたい。観光対象は観光資源と観光施設（サービスを含む）から構成されるという考え方（見解 A）では、観光資源は観光対象の素材と捉えているが、観光資源の分類については3つの考え方がある。

第一に、観光資源を自然観光資源、人文観光資源、複合型観光資源に3分類する考え方である。前田・橋本（2006）、岡本・越塚（1986）などがあげられる。前田・橋本は、自然観光資源は自然によって創造された造作物、人文観光資源は人間の手によって創られた有形・無形の所産、自然観光資源と人文観光資源が密接に結びついた観光資源が複合型観光資源（大都市、農山漁村、郷土景観、歴史景観など）と称している。そして、観光者の欲求充足に直接寄与する観光施設（含サービス）として、宿泊施設、飲食施設、物品販売施設、レクリエーション施設、文化・教育施設、観光案内施設、公共サービス施設をあげている。

第二に、観光資源を自然観光資源と人文観光資源に分類する考え方である。末武（1984）北川（1999）日本交通公社（1973）などがあげられるが、末武は集落を人文観光資源に含めている。北川は通常は2分類できるとしつつ、観光資源として観光対象施設や複合型観光資源を分類する場合があるとしている。また、末武は、観光資源を観光対象として機能させるための観光施設（諸サービスを含む）を、移動関係施設、滞在および接遇関係施設、情報関係施設、観光レクリエーション関係施設に分類しており、前田・橋本が観光媒体としている移動関係機能を観光施設に含めている。北川は、観光資源の利用促進、利用サービスのためにつくられた観光施設を、宿泊、レストラン、文化・教育等に関連する施設に分類しており、末武と北川では観光施設に含める施設が異なっている。

第三に、観光資源を4分類する考え方である。足羽（1997）は、津田（1969）の観光資源分類を参考にして、自然的資源、文化的（人文的）資源、社会的資源、産業的資源に分類している。観光支援施設の分類については不明である。

以上のように、見解 A では、観光資源を自然観光資源と人文観光資源、複合型観光資源に3分類する考え方と自然観光資源と人文観光資源に2分類する考え方が多い。観光者の欲求充足に直

接寄与する施設については、観光施設（含サービス）という表現で共通しているが、観光施設に含める施設の範囲と分類方法は多少異なっている。

次に、観光対象に観光施設を含めないという考え方（見解 B）についてみてみたい。この見解では、観光対象、観光資源の捉え方が研究者によって多少異なるが、観光資源の分類については3つの考え方がみられる。

第一に、観光資源を自然観光資源、人文観光資源、複合型観光資源に3分類する考え方である。井上は、戦前は観光資源を「無意識的資源」と「意識的資源」に分けていたが（井上 1940）、戦後は自然観光資源、文化観光資源、両者のまじり合った観光資源に分類している（井上 1967）。須田（2009）は、自然観光資源、歴史文化観光資源、複合観光資源に分類し、羽田（2011）は自然系資源、人文系資源、複合資源に分類している。また、須田は、観光行動を支援し、その効果をより高めるものを観光（支援）基盤として、宿泊・交通・情報等をあげており、前田・橋本が観光媒体としている機能を観光（支援）基盤に含めている。

第二に、観光資源を自然観光資源と人文観光資源に分類する考え方である。田中（1950）は、「狭義における本来的観光資源」として、自然的観光資源と人文的観光資源をあげ、「広い意味において観光資源を構成するもの」として、上記の2つに加え、社会的条件（社会的環境）をあげている。田中は人文的観光資源の中に都邑や村落を入れている。山村（2006）は自然観光資源と人文観光資源に分類し、溝尾（2011）は、自然資源、人文資源Ⅰ、人文資源Ⅱに分類している。

また、田中は、観光客の受入態勢を作るために整備する諸種の施設等を観光施設とし、衛生・交通及び宿泊の施設、保健療養・娯楽・文化教養・産業経済施設をあげている。山村（1997）は、「観光客に関係する施設」として、観光客が目的とする観光対象施設（テーマパーク、スキー場など）と観光客が利用する観光利用施設（宿泊施設、飲食施設、土産物店、交通機関など）とに分けている。溝尾は、観光者に飲食や物品販売、宿泊などに対応するサービスを提供する施設を観光施設と呼んでいる。このように、観光施設に含める施設の範囲は研究者によって異なる。

資源論・事業論の立場に立つ小谷（1994）は、観光資源を自然系資源と人文系資源に分類し、観光施設に相当する施設を便益施設と称して、交通・鑑賞・上下水道・電気・通信・飲食・宿泊施設などをあげている。

第三に、観光資源を4分類する考え方である。津田（1969）は、国際観光資源（国際観光対象）を、自然的資源、文化的資源、社会的資源、産業的資源の4つに分類している。社会的資源には道路施設や交通施設を含め、郷土景観、歴史景観などは国際観光資源に含めていない。国際観光の受け入れの基盤となる各種施設である「国際観光施設」は、国際観光宿泊施設とその他の国際観光施設（休憩施設、案内施設、食事施設、国際会議場など）に分けている。香川は、観光事業論の立場で観光資源を自然観光資源、人文観光資源、複合観光資源、施設観光資源の4つの枠組で分類している。

このように、見解 B でも観光資源を自然観光資源と人文観光資源、複合型観光資源に3分類する考え方と自然観光資源と人文観光資源に2分類する考え方が多い。観光者へサービスを提供する施設は、観光施設、観光（支援）基盤、国際観光施設などと呼んでいるが、そこに含まれる施設の範囲は研究者によって異なる。

3) 観光資源分類の変化

観光資源や観光施設の分類の特徴を検討してきたが、今後、観光者の観光ニーズや観光行動の変化にともない、観光の対象となる観光資源の種類や範囲も変化していく。その結果、観光資源の分類も多様化していくことが予想される。

戦前、井上（1940）は、「総合的資源こそわれわれの通常に接触するところのものである」と、複合的観光資源が多く存在することを述べているが、北川（2008）は、観光行動の多様化にともない、産業観光資源や都市の景観そのものが重要な観光資源となるなど、観光資源の領域も複雑化の傾向にあるとしている。また、前田・橋本（2006）は、観光対象の現代的特徴として、計画的かつ積極的に観光資源の発掘や観光施設（含サービス）の建設の実施、複合型観光資源の役割の高まり、観光対象に占める観光施設（含サービス）の役割の高まり、生活文化の観光対象化をあげており、観光資源の分類を考える上での示唆を得ることができる²⁸⁾。

(3) まとめ

これまで、観光資源等の定義と分類に関して研究者の考え方の特徴を整理したうえで、それらの分類と検討を行ってきた。その結果、次のことが明らかになった。

- ①観光対象の構成要素の考え方には、観光対象は観光資源と観光施設（含サービス）から構成されるという考え方と観光対象に観光施設（含サービス）を含めないという考え方がある。
- ②前者では、観光対象は「観光者の欲求を喚起したり、充足させる目的物」（岡本・越塚 1986）、観光資源は観光対象の素材という定義が一般的である。
- ③後者では、観光者の立場に立って観光資源を捉える見解と事業の採算性から観光資源を捉える見解の二つがある。観光者の立場に立って観光資源を捉える見解では、研究者によって観光資源の定義が多少異なり、観光対象の定義についても複数の考え方がある。事業の採算性から観光資源を捉える見解では、前者と観光資源の捉え方が異なる。
- ④観光資源を観光対象として機能させ、あるいはそれ自身が観光対象となる施設については、観光施設、国際観光施設、観光客に関係する施設、観光（支援）基盤などの用語が使われているが、観光施設という用語が一般的である。
- ⑤観光資源の分類については、観光対象は観光資源と観光施設から構成されるという考え方、観光対象に観光施設を含めないという考え方のいずれにおいても、観光資源を自然観光資源と人文観光資源、複合型観光資源に3分類する考え方と自然観光資源と人文観光資源に2分類する考え方が多い。
- ⑥観光者の欲求充足に直接寄与する施設である観光施設（含サービス）については、研究者によって対象とする施設の範囲と分類方法に大きな差異がみられる。

4. おわりに

本稿では、戦前から現在まで、観光対象と観光資源、観光施設の定義と分類について、研究者がどのように考え、どのように分類してきたかについて整理・検討してきた。研究の結果、観光資源という用語の定義、観光資源の各分類に含める事物の内容、観光施設に含める施設の内容は研究者によって異なることが明らかになった。

しかし、地域の活性化にとって観光の果たす役割が増大し、地域が主体となった観光地域づくりが重要な政策課題となっている今日、最も重要な概念である観光資源の定義と分類方法がこのような状態で決してよいはずはない。観光地域づくりに関わる人々が理解できるわかりやすい概念規定が必要ではないだろうか。

本稿では、観光資源の定義と分類に関する各種見解の整理および考察を行ってきたが、概念整理の枠組みや内容の検討に不十分さがあることは否めない。より一層考察を深めることを今後の課題としたい。また、観光資源の定義と分類方法を整理することに主眼をおいているため、観光資源の定義および分類方法に関する筆者の見解は別の機会に述べたい。

付記：本研究は、科学研究費助成事業（基盤研究 C）「北陸・飛騨地域の伝統的文化・自然資源の観光的価値に関する研究」（23614027）の助成を受けたものである。

注

- 1) 辻原康夫は、観光資源の解釈を複雑にしている最大の要因は、事業論の視点から捉える場合と観光者による行動論として捉える場合の両面性があげられるとして、観光資源を強引に一本化しようとするのではなく、事業論と行動論の各々の視点から改めて定義や解釈の範囲を考察することが理に適った方法論かと思われると述べている（香川 2007：101 - 102）。
- 2) 寺前秀一（2007）pp. 105-106.
- 3) 井上萬壽蔵（1967）pp. 128-129.
- 4) 末武直義（1984）p. 36.
- 5) ジンマーマン著、ハンカー編、石光亨訳（1985）pp. 13-31.
- 6) 佐藤 仁（2011）pp. 15-19.
- 7) 科学技術・学術審議会資源調査分科会（2010）pp. 1-2.
- 8) 井上萬壽蔵（1940）pp. 64-71、同（1957）p. 139、同（1967）pp. 86-87, pp. 128-129.
- 9) 田中喜一（1950）pp. 86-94, pp. 304-311.
- 10) 津田 昇（1969）pp. 75-82.
- 11) 前田勇・橋本俊哉（2006）pp. 10-11、pp. 122-124.
- 12) 末武直義（1984）pp. 34-50.
- 13) 岡本伸之・越塚宗孝（1986）pp. 42-44.
- 14) 小谷達男（1994）pp. 48-63.
- 15) 足羽洋保（1997）pp. 5-7.
- 16) 山村順次（1995）pp. 2-3, p. 60、同（1997）p. 81、同（2006）p. 3.
- 17) 溝尾良隆（2001）p. 120、同（2003）pp. 17-18、同（2009）pp. 44-45、同（2011）pp. 9-17.
- 18) 香川眞（1996）p. 5、同（2007）pp. 101-102.
- 19) 北川宗忠（1999）pp. 10-12.
- 20) 須田 寛（2009）pp. 47-67.
- 21) 羽田耕治（2011）pp. 68-73.
- 22) 日本交通公社（1973）p. 55.
- 23) 第3章では、第2章で整理した研究者の考え方や見解を引用して考察を行うが、引用文献と引用ページは第2章で示したことから、第3章では引用ページは省略する。
- 24) 観光法規研究会編（1963）pp. 69-70.
- 25) 末武直義（1984）p. 37.
- 26) 小谷達男（1994）pp. 52-53.

27) 溝尾良隆 (2011) pp. 9-11, pp. 17-19

28) 井上萬壽蔵 (1940) pp. 68-70, 北川宗忠編著 (2008) p. 55. 前田勇・橋本俊哉 (2006) pp. 127-131.

参考文献

- 足羽洋保 (1994) 『新・観光学概論』 ミネルヴァ書房。
- 足羽洋保 (1997) 『観光資源論』 中央経済社。
- 羽田耕治 (2011) 「観光資源と観光対象」 羽田耕治監修 『観光学基礎 (第4版)』 JTB 総合研究所。
- 井上萬壽蔵 (1940) 『観光読本』 無何有書房。
- 井上萬壽蔵 (1957) 『観光教室』 朝日新聞社。
- 井上萬壽蔵 (1967) 『観光と観光事業』 国際観光年記念行事協力会。
- ジンマーマン著、ハンカー編、石光亨訳 (1985) 『資源サイエンス (人間・自然・文化の複合)』 三嶺書房。
- 香川眞 (1996) 「現代観光の構造と性格」 香川眞編著 『現代観光研究』 嵯峨野書房。
- 香川眞 (2007) 「観光資源と観光開発」 香川眞編、日本国際観光学会監修 『観光学事典』 株式会社。
- 観光法規研究会編 (1963) 『観光基本法解説』 学陽書房。
- 科学技術・学術審議会資源調査分科会 (2010) 『我が国における自然資源の統合管理の在り方について』。
- 北川宗忠 (1999) 『観光資源と環境』 サンライズ出版。
- 北川宗忠編著 (2008) 『観光・旅行用語辞典』 ミネルヴァ書房。
- 小谷達男 (1994) 『観光事業論』 学文社。
- 前田勇・橋本俊哉 (2006) 「観光」の概念」 前田勇編著 『現代観光総論 (第3版)』 学文社。
- 前田勇・橋本俊哉 (2006) 「観光行動の対象 (1)」 前田勇編著 『現代観光総論 (第3版)』 学文社。
- 溝尾良隆 (2001) 「観光地と観光資源」 岡本伸之編著 『観光学入門』 有斐閣。
- 溝尾良隆 (2003) 『観光学』 古今書院。
- 溝尾良隆 (2009) 「観光資源と観光地の定義」 溝尾良隆編著 『観光学全集第1巻 観光学の基礎』 原書房。
- 溝尾良隆 (2011) 『観光学と景観』 古今書院。
- 日本交通公社 (1973) 『観光事典』。
- 日本交通公社調査部編 (1994) 『観光読本』 東洋経済新報社。
- 尾家建生 (2009) 「観光資源と観光アトラクション」 『大阪観光大学紀要第9号』。
- 岡本伸之・越塚宗孝 (1986) 「観光対象と観光資源」 前田勇編著 『観光概論 (第8版)』 学文社。
- 佐藤 仁 (2011) 『「持たざる国」の資源論』 東京大学出版会。
- 須田 寛 (2009) 『観光～新しい地域づくり～』 学芸出版社。
- 末武直義 (1984) 『観光事業論』 法律文化社。
- 田中喜一 (1950) 『観光事業論』 観光事業研究会。
- 寺前秀一 (2007) 『観光政策学』 イブシロン出版企画。
- 津田 昇 (1969) 『国際観光論』 東洋経済新報社。
- 山村順次 (1974) 「人文観光資源」 鈴木忠義編 『現代観光論』 有斐閣。
- 山村順次 (1995) 『新観光地理学』 大明堂。
- 山村順次 (1997) 「観光対象－観光資源と観光施設－」 長谷政弘編著 『観光学辞典』 同文館。
- 山村順次 (2006) 『観光地域社会の構築』 同文館。